

## 「地域研究者」の条件

吉村慎太郎

博士課程は東京大学大学院社会学研究科であったが、修士課程は東京外国語大学大学院地域研究研究科を修了した私にとって、当然「地域研究」というものにそれなりの想いがある。簡単に言えば、それは、身近にありながら遠き存在とでも言うことができる。

私の専門は狭く言えば、イラン近現代（政治）史であるから、学問分野で言えば、歴史学であり、地域としてはイランという国家を研究対象に設定しているといえる。であれば、ある特定の地域（国家）を研究する者は、すべからく「地域研究者」なのだろうか？もちろん、そうではない。存外安易に「私は地域研究者です」と名乗ったりする院生に出くわすと、内心腹立たしくなる。「地域研究者」という限りは、クリアすべき幾つかの条件があると考えているからである。

その第一は、意外と簡単だ、あるいは当然だと言われるかもしれないが、「現地語」に通じていることが挙げられる。ここでは、どの程度当該言語に通曉しているかは詳しく問わないが、敢えて言うとなれば、現地の高校生が持つ語学力は最低必要かもしれない（といっても、個人差だけでなく、日本同様に「若者言葉」が次々に編み出される現実から、これさえ決して容易ではないが）。

第二に、上記現地語への通曉度に関連し、ふたつ目の条件として、当該地域・国家の歴史、その過程で生まれた文化（人工的なモノ、人生観／死生観／世界観・・などの価値観や制度を含む）への知識と理解がある。もちろん、それを前提にすれば、現地語による現地人とのコミュニケーションはスムーズに運び、彼ら／彼女らと一体感さえも共有できる。内容ある会話と意思疎通は、単なる語学力ではなく、当該地域・国家の歴史や文化への理解によって支えられた知的バックグラウンドなしにはあり得ない。

さらに、どの時代を研究しようとも、研究対象の地域の「現在」に対する

洞察力も不可欠であり、それが第三の条件と言える。もちろん、「現在」というのは刻々と変化し、未来を次々に飲み込み、時間的には過去化していく。もちろん、文化と同じく、その内容が豊富かつ重層的であるが故に、その把握は極めて難しい。私の場合、近現代政治を研究しているとはいえ、日頃過去のことを穿り返すことで汲々としているから、現状分析的作業は負担であることに相違ない。「地域研究者」であり得るための識別因子としての「現在」への拘り、たとえ過去のことも現在的に読み解く姿勢は、次の条件を引き出すことにもなる。

それは、「地域」を前提に「地域を超える」、「越境」という第五の条件である。言うまでもなく、今私たちが生きている「現在」という時代は、一般に第二次大戦以降と捉えるような、より長期の歴史的「現代」とは異なり、私たちが今生きる同時代 (contemporary) である。その特徴は、あらゆる分野と地平での移動／変化、それに伴う制度的枠組みや価値観の再編／融合の急激かつ構造的な進行であると考えられる。その意味で、固定的な一地域や国家に安住した研究は、「現在」において成立しにくい。だからこそ、「現在」と付き合う限りは、状況に応じて、分析手法面での所謂「学際」性はもちろん、地域の柔軟な組み換えに伴う「伸縮性」も不可避である。だが、時代的にも空間的にも固定化しがちな我が身の研究姿勢は容易に変えられないから、この条件の達成もすこぶる困難である。

以上、「地域研究者」の条件をテクニカルな面に絞ってごく簡単に語ってきた。しかし、それを言葉足らずと自身で感じるのは、研究者の姿勢に関わるソフトな条件があるからである。その点で第一に指摘したいのは、地域との「対等性」に基づく「冷めた情熱」である。前者は、自らが身を置く日本なり、欧米的（しばしば学問的）価値観に胡坐をかき、特に研究対象とする地域が非欧米圏である場合には、見下すことはないまでも、既成の慣れ親しんだモノサシで対象の寸法を測り、また手馴れた挟み捌きよろしく裁断することを厳に戒めるものである。後者は、研究対象への飽くなき興味から、「偏愛」にも似て、対象の不条理な部分さえも肯定してしまう危険性に反省を求めるものである。

また、上記「対等性」に関連し問い直すべきは既存のディシプリンと地域

研究との関係である。今回のシンポジウムでの地域研究の「総合性」での議論を踏まえれば、分析手法としてのディシプリンの有効性や、それらの積極的活用は否かではない。問題はそれが「万能」ではないことを地域から知ることである。それに従えば、研究対象の生の地域とディシプリンも「対等性」に立脚した関係にあると言ってもよい。加えて、地域の不条理の抽出・分析も、ディシプリンによる公式論との照合に依存するのではなく、地域全体から醸し出される粹と自己との葛藤を前提とすべきではないだろうか。また、そうした「対等性」を認めるとすれば、反ディシプリンの旗も時に孤立しても掲げ続けるべきであると考ええる。

以上、地域研究者の条件を振り返ると、動態的対象を前にしたテクニカルな技能とあるべき心構えに関わる条件もあると考えられる。

その他、地域研究が重視すべき「資料」、理論化という課題などを含めて、まだ書き残したことも多いが、とにかく地域研究は手を伸ばしても容易に手の届きそうにない「片想い」の研究領域である。今回のシンポジウムはこうした点を再認識できた点でも有意義であり、そのために研究の合間を縫って準備に忙しくされた院生や教員、またご参加頂いた方々に改めて感謝の意を表したい。